

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視 点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の 目標	取 組 の 内 容		校 内 評 価		学校関係者評価 (2月21日実施)	総合評価（3月10日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	・「たくましく生きる力」を育てるため、小学部から高等部までの系統性のある教育活動の実践と教育課程の確立を図る。	①自立活動の視点を意識した個別教育計画作成と計画作成の見直しを行い、授業実践への活用を進める。  ②授業改善の仕組みづくりを全校的に進める。	①「個別教育計画作成の手引き書」を活用し、自立活動の視点を取り入れた個別教育計画の作成を行う。また見直し期間を設定し、チームで見直し、教育活動に活かす。  ②学部、学年を中心に単元計画を軸とした授業改善の仕組みづくりを推進し、学部経営計画に反映させる。	①「個別教育計画作成の手引き書」を有効活用できたか。計画的に見直し、授業実践を行ったか。  ②学部、学年ごとに単元を軸とした授業改善の仕組みづくりが進んだか。学部経営計画に反映したか。	①各学部により手段は異なるが、「個別教育計画作成の手引き書」の重要部分をコピーして配付し、検討前に各自が確認したり、会議の中でポイントを皆で確認することで、年間評価の作成と検討時に活用できるようにした。「流れ図研修」「単元計画研修」を開催し、活用を推進した。そのことが指導計画の見直しや良い授業実践につながった。校内研究を通じて授業で自立活動を意識することが増えた。  ②授業の目標と評価をより明確化するために、研究授業の指導案の書式改定を行い、授業改善を推進した。毎回の学年会や授業担当者間で授業の振り返りを実施、その内容をまとめて共有する等各学部で授業反省の仕組みを習慣化したことで授業改善につなげた。単元計画の役割や手引き書の活用法の再確認も行った。	①個別教育計画作成の手引き書の活用を引き続き促し、自立活動の視点を取り入れた計画を立てられるようにする。また、個別教育計画の目標が実際の授業に活かせるように単元計画を立てる。  ②学年会等で授業の反省を行い、授業担当者を中心に授業改善をする流れを今後も継続していく。この流れを次年度の学部経営要項に記載する。	①学校運営協議会(以降CS):保護者アンケートで個別教育計画に関する項目と分かりやすく説明しているかの項目がAB評価合わせて97%と高く、本校の強みである。計画書のファイルを持ち帰る等具体的な実践が結果につながりその手応えを把握できているのが良い。  ②CS:ICTの活用について教職員アンケートではAB評価合わせて94%と高い評価だが、保護者は81%でズレがある。わからないとの回答も15%あった。どう発信するかが課題である。	①各学部で「個別教育計画作成の手引き書」の活用方法を周知し、自立活動の視点を意識した個別教育計画の作成と指導計画の見直しや良い授業実践となった。小中高が系統的に自立活動の視点で主体的に学ぶ授業を誰もが行うことが課題。  ②研究授業の指導案の書式改定を行い授業改善に取り組んだ。各学部で授業反省と振り返りの仕組みを習慣化した。ICT活用も含めて保護者への発信が課題。	①手引き書の理解をより深め、併せて子どもの実態把握を丁寧に行い、自立活動の視点を取り入れて目標を立て、個別教育計画を作成する。それを実際の授業に活かせるように単元計画を立て、系統性のある教育活動を行う。主体的に学ぶ授業づくりを推進する。  ②授業反省と振り返りの仕組みを学部経営要項に記載する。授業参観や学習発表会、学年だより、学校HP等で良い授業実践を各部署で意識して発信する。
2	児童・生徒指導・支援	・児童・生徒一人ひとりのコミュニケーションの向上と自発的な行動の育成をめざし、家庭や地域とも連携した指導・支援の充実を図る。	①将来を見据え、児童・生徒の実態に合わせた自発的なコミュニケーション指導・支援を行う。  ②学校以外の場所においても、コミュニケーションツール等を活用することができる。	①個々の実態に合わせたコミュニケーションツールを授業や生活の場で活用し、コミュニケーション意欲が高まるよう環境を整える。  ②事業所や保護者に対して湘南支援ブランドの研修会等を実施する。事業所対象の学校見学を実施する。	①自発的なコミュニケーション意欲が高まる環境設定を整えることができたか。  ②事業所や保護者が、湘南支援ブランドについての理解が進んだか。	①校内研究の取組と連携して要求や質問に答える場面、発表等を整理し、各場面で伝達手段の活用を工夫、コミュニケーション意欲が高まるように指導した。各学部とも言葉やカード、ジェスチャー、書字など児童生徒の実態に沿ったコミュニケーション手段を活用して自分からの発信が増えた。高等部では学校で使用している写真カードを福祉サービス事業所に引き継ぎ、事業所で活用しているスケジュールボードやタイマーを学校へ導入した。「Yes/No」で答える、選択肢を提示して自分の気持ちに近い方を指す、簡単な手話の利用等、個々に応じた方法で伝える時もあった。  ②保護者に対して行事予定の備考欄や学部だよりでシンボルマークや身振りサインのイラスト、視覚支援を工夫した指導等を掲載した。動画をGoogle Classroomで発信した。地域対象の学校公開日(10/15～18)に延べ147名が参加、102名の方が湘南支援ブランド説明会にも参加した。校内保護者対象の学校見学日(1/22～24)の配付資料に湘南支援ブランドの一部をプリントして知らせた。(見学者110名)相談支援通信に支援グッズの実践例や使用前後の変化等の記事を掲載、教員や保護者へ発信できた。地域の学校の特別支援学級担任向けに湘南支援ブランドやその実践について紹介した。	①有効なコミュニケーションの方法について保護者と情報交換を積極的に行う。卒業後の事業所と主体的な行動を促す点を引き継ぐ。慣れない人とも本人がコミュニケーションできるよう担任以外の人と関わる場面を設定し、意思伝達の練習を積み重ねるとよい。  ②次年度も研修、学校公開、学校見学、学部だより等において湘南支援ブランドについて広め、地域や家庭で活用できるようにしていく。	①CS:コミュニケーションや子どもの苦手を支援する手段として湘南支援ブランド等の活用をさらに進めると良い。 保護者アンケート:一人ひとりの実態に応じたコミュニケーション指導を行っているかの項目でAB評価を合わせ93%と高い評価である。(R4年度90%、R5年度93%)  ②CS:「専門性」という言葉の意味が分かりにくいと感じた。保護者アンケート:教職員は専門性のある指導をしているかの項目はAB評価を合わせ85%でわからないとの回答も9%あった。アンケート結果から見ると多くの方は納得している。一方で少数だが不満を持っている方もいる。そこに次年度は着眼していく。	①各学部とも言葉やカード、ジェスチャー、書字など児童生徒の実態に沿ったコミュニケーション手段の活用に取り組み、環境を整えるよう努めた。今後も引き続き同様に取り組み、小学部から高等部まで自発的な行動の育成をめざすよう全体の意識を高めたい。  ②各学部、校務グループ全体で本目標を意識して積極的に周知と紹介に努めた。切れ目ない支援部会で確認した「AACの活用でコミュニケーションスキルを伸ばす湘南支援学校での学習支援紹介」は、改訂してから次年度掲載したい。	①児童生徒それぞれの実態に応じてコミュニケーションの意欲を高めるために、校内研究と連携しながら進める。例えば、要求場面とそれ以外の場面での指導の仕方について社会性の観点を取り入れたり、自発的な行動の育成をめざして言語指示を減らす等、各学部全体の環境を整える。  ②次年度もどの学部・校務グループでも様々な手立て(研修、学校公開、学校見学、学部だより等)を工夫して湘南支援ブランドについて広め、地域や家庭で活用できるようにしていく。児童生徒理解と地域移行のために意思伝達の力を伸ばすことを常に意識して取り組む。
3	進路指導・支援	・自立と社会参加をめざし、児童・生徒一人ひとりのニーズと適性に応じた進路指導・支援を行う。	①社会的スキルの向上と定着に向けた取り組みについて、各学部、学年においてテーマを定め取り組む。	①小学部（低学年・高学年）中学部、高等部（各学年）で、テーマと具体的な取り組み方法について計画を立て、学期ごとに振り返りを行う。	①学部、学年ごとのテーマに沿った指導の実践により、個々の力が身についたか。	①全学部とも段階的な学習の積み重ねを考慮し、学年の実態に応じたねらいを設定して校外学習計画を立てて年間を通して指導し、成果を上げた。小学部は個々の指導について検討を重ね、登下校時の身支度やスケジュールに応じた行動等一人でできることが増えた。中学部は毎回の近隣校外学習で道路の歩き方や横断歩道の渡り方等を指導して交通ルール理解が進んだ。高等部は生徒自身が記入する振り返りシートを活用し、自己理解や意欲の向上等、成長を可視化して実感でき、成果となった。	①年間計画を立てる際に校外学習を必ず盛り込んで、年度初めに班会で小中高のねらいを確認しながら、校外学習の計画を検討する。社会的スキル向上を目指して、さまざまな経験ができる機会を計画的に設けていく。	①保護者アンケート:将来に向けて、自立と社会参加を目指した指導を行っているかの項目はAB評価を合わせ93%で、高い評価だがR4年度91%、R5年度95%であった。今後も継続だけでなく、より具体的に取り組んでいく必要がある。	①各学部でテーマ設定したことで、教職員の意識も高まり、個々の力を伸ばす具体的な指導実践につながった。今後も小中高の系統的な取組として継続していく。特に小6→中1、中3→高1の間で学部が変わっても戻らないようにしたい。	①今後も小中高の系統的な取組として継続していく。学部間の連携を充実させてこれまでの取組を土台に、さらに個々に応じた自立と社会参加に向けた取組を進める。主体的に取り組めるよう進路学習の進め方を工夫する。

	視 点	4 年間の目標 (令和6年度策定)	1 年間の 目標	取 組 の 内 容		校 内 評 価		学校関係者評価 ( 2 月 21 日 実施 )	総合評価 ( 3 月 10 日 実施 )	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3			②児童生徒の卒業後の生活をより具体的にイメージできるよう、進路情報を提供する。	②学部、学年ごとに次のステージの生活や進路情報について情報発信を行う。	②本人や保護者のニーズに沿った情報提供ができたか。	②高等部三年保護者進路学習会（成年後見制度）を録画し、全校対象の Google Classroom に掲載して、お金に関わる支援制度の情報提供を初めて行った。PTA 進路学習会では様々な形態の事業所・企業より 4 名の講師を迎え「就労について・長く働くために」のシンポジウムを行い、参加保護者 20 名から好評を得た。5 月に福祉事業所合同説明会も開催(参加者 54 名)した。	②シンポジウム形式の進路学習会は継続したい。今後は保護者学習会の内容の共有方法を企画検討していきたい。福祉事業所合同説明会の開催は検討課題となっている。	②保護者アンケート:保護者のニーズに合った進路情報の提供を行っているかの項目で AB 評価を合わせて 88%で、R5 年度の 91%より少し評価が下がった。CS:進路は関心が高い。教員の企業研修も紹介すると良い。	②各学部に進路班の教員を配置できれば小中のつながり、中高のつながりの視点で情報共有を行える。福祉事業所合同説明会の開催は検討課題である。	②今年度工夫した内容や方法を継続する。皆で共有できるよう Google Classroom への掲載を今後検討する。福祉事業所合同説明会のより良い開催方法について検討する。
4	地域等との協働	・共生社会の実現に向け、地域との連携、協働による活動を展開し、障がいのある子どもの理解を推進する。	①地域資源を活用した学習活動の充実を図る。	①地域連携事業や学校運営協議会等の仕組みを活用し、地域資源を活用した学習活動を広げる。	①地域資源を活用した学習活動が広がったか。	①各学部とも校外学習では、JR 線、神奈中バス、駅周辺の商業施設を利用して段階的に経験の幅を広げていく学習ができた。高等部では清掃活動を通して交流した。(中原小学校 <u>6 回</u> 、中原公民館 <u>1 回</u> ) ららぽーと平塚店、平塚市役所、トヨタ平塚四之宮店で作品展に出席し多数来場した。アンケート回答数は少なかった。「ちょこっと湘南だより」で地域情報を発信した。特に、インクルーシブ湘南でのイベント企画では、本校が活用している支援グッズの紹介と感覚支援グッズを体験できるブース紹介や支援グッズ作成コーナーを設置し参加型企画とした。想定人数を上回り大変盛況で特別支援学校を知ってもらう良い機会となった。	①今年度の反省を次年度に引き継ぎ、看板表示の工夫等作品展会場の改善進め、来場者数を増やす。他校と共同開催の作品展やインクルーシブ湘南のより良い取り組みについて意見交換を行い、目的や内容について精査しながら、地域に向けて本校や特別支援教育の情報発信を今後も進める。	①CS:地域との連携に関して、学校がどんな取り組みをしているのかわかるように、今後も工夫して発信すると良い。公民館清掃や公民館祭りの作品展示で協力いただいている。今後教育施設としての役割も期待されており、学校と新しい活用をともに考えたい。	①地域資源を活用した体験的な学習活動を各学部ともねらいに沿って計画的に実施できた。高等部では新たに小学校での清掃活動の取組も進めた。作品展では会場のアピールやアンケート内容の簡素化といった改善が課題である。	①今年度の取組を参考に、教科等のねらいをより明確にして、地域資源を活用した学習活動計画を立て、実施する。インクルーシブ湘南ではより良い取組となるように目的や内容を精査し、本校や特別支援教育の情報発信を今後も進める。
			②地域の学校との交流及び共同学習を広げる。	②各学部において「交流及び共同学習ガイド」を参考に、交流校とねらいを確認し計画、実践を行う。また、事前の打ち合わせを丁寧に行い、ねらいや位置づけについて共有して実施する。	②共同学習の視点をもち、学校間交流が実施できたか。	②児童生徒が居住する地域の学校と居住地交流を実施した。(小学部 27 ケース・15 校、中学部 4 ケース・3 校)体育授業の交流(小)は教科のねらいも含み実施できた。音楽授業の交流(中)は生徒との関わりを楽しんで教科のねらいも達成した。中原中学校特別支援級との交流は中学生と協力してゲームを行い、同年代の生徒と一緒に楽しめた。高浜高校との交流は 1 回(6 人)と昨年度より減少した。ボランティアは 3 月末時点で 10 名が延べ 89 回の活動を行う等、昨年度に比べて大幅に増加した。ボランティアの方が得意な内容と本校がお願いしたい内容に一部差がある場合もあった。	②引き続き「共同学習」のねらいを意識して計画する。中原中学校や高浜高校との交流はそれぞれ目的を明確にし、活動内容や生徒の様子を情報共有して進める。来年度もボランティアの募集を積極的に進めるが、活動に際しては事前に本校の見学や説明を丁寧に行う。	②CS:切れ目ない支援部会では社会参加への流れるような支援のためには多職種の連携と情報提供が課題で、保護者支援が本人支援となるため、今後も進めたい等の意見交換を行った。保護者アンケート:居住地交流や学校間交流についての項目は AB 評価を合わせて 90%で R5 年度と同じだった。R4 年度は 81%だったので 9%上がった。	②感染症対応が 5 類となり 2 年目、昨年度に比べて交流をより多く推進できた。居住地交流は、引き続き児童生徒が見通しを持ち、意欲的に活動できるよう相手校と充分打ち合わせをして実施する。	②引き続き「共同学習」のねらいを意識して計画する。中原中学校や高浜高校との交流はそれぞれ目的を明確にし、活動内容や生徒の様子を情報共有して進める。本校の生徒が安心して活動できる内容の検討も行う。ボランティアの募集を積極的に進め、事前説明を通して活用への理解を深める。
5	学校管理 学校運営	・安心・安全な学校づくりの推進のため、危機管理体制の確立を図る。	①教職員個々の危機管理意識を向上させるとともに、危機管理マニュアルの見直しを進める。	①危機発生時に有効活用できる各種マニュアルの見直し、作成を進める。名札着用の徹底をする。	①マニュアルの見直しと作成ができたか。名札着用の徹底ができたか。	①スクールバスの運行経路沿いにある避難所を確認し、マップを作成、各号車に設置し、介助員に周知をした。薬の取り扱いに関する研修会を実施した。60 名が参加、理解が深まったとの回答が得られた。また 58 名の職員から今後も継続してほしいとの回答も得た。安全な学校運営を行えるよう市販薬の取り扱いについて各学部の意見を取り入れながら検討しマニュアルの見直しを行った。今年度の訓練等の反省をもとに来年度の緊急時対応訓練、救急法講習会、児童生徒情報交換会等の計画準備ができた。預金利率の上昇による会計書類の作成方法の変更や領収書のコピーの追加について来年度に向けて修正をすることができ、マニュアルを活用する職員が増えた。名札の着用はある程度定着した。	①今後も避難場所の新設や変更等がないか確認していきながらマップの見直しを随時行っていく。	①CS:地域や行政と情報を交換し、具体的な事例や仕組みを共有確認すると良い。防災安全部会で連携を図りながら、地域防災訓練等を中学校小学校と実施できるとよい。	①危機管理の視点で各種のマニュアル、ガイドラインの見直しと改訂を昨年度に引き続いて実施した。アレルギーや発作対応等の研修を行い、職員へ周知することができた。全員が理解できるよう進めたい。学校評価アンケートの回収率が 7 割だったので実施方法を紙の配付と Forms によるアンケートの両方を準備する等の工夫が必要である。	①今年度見えた各課題については、反省点を取りまとめて各校務グループや学部で検討し、改善点を次年度に引き継いで実施できるようにしていく。老朽化した部分の確認と速やかな修繕、安全対策を施して学習環境を整える。危機管理に関して、研修や講習、訓練に自分ごととして取り組んで想定外を減らし、教員が適切に行動することをめざす。名札は引き続き着用を促す。
		・人権に配慮した指導支援に努め、組織的に不祥事の未然防止を図る。	②人権尊重の視点に立ち、児童生徒が安心して過ごせる環境づくりを推進する。	②さん付け呼称の徹底と人権に配慮した児童生徒への丁寧な言葉遣いを励行する。	②さん付け呼称や人権に配慮した丁寧な言葉遣いができたか。	②肯定的な言葉遣いをそれぞれが意識して指導を行ったことで、おおむね生徒も落ち着いて学校生活を送ることができた。さん付け呼称についてはほぼ定着したが、丁寧な言葉づかいについては個人差があり完全に定着したとはいえなかった。1 月に全職員向けに人権研修のフィードバックとワークショップを実施した。	②丁寧な言葉遣いについては、「いつでも・どこでも・誰とでも」(職員室で教員同士も)を心がけ、定着を図る。	②保護者アンケート:学校へ行くことを楽しみにしているかの項目であまり思わないが 7%、思わないが 3%で 10%が楽しみで減らず手立てを考えていく。	②肯定的な言葉遣いなど人権を意識した関わりについて、今後も全校で共通認識を持って取り組んでいく。人権尊重に関してはより意識を高める必要がある。	②引き続き肯定的な言葉遣いを心がけ、定着を図る。研修内容を自分ごとと捉えられるよう工夫して開催する。人権に配慮した指導については、模範的な取組の紹介等を通して啓発する。